

# 留学による短期的・長期的影響に関する一考察 — 個人別態度構造分析による留学の教育的価値 —

前田 ひとみ

(外国語学部英米語学科)

## A Study on Short- and Long-term Impacts of Study Abroad: The Educational Value of Study Abroad by Using the Personal Attitude Construct Analysis

Hitomi MAEDA

(Department of English Language Studies)

長年にわたり海外留学の効果や教育的価値に関する研究は国内外共に数多く存在している。しかし、留学前後の学習者自身の変化や成長に着目した研究、学習者個人に対する留学の長期的影響に関する調査、及び学習者自身がその変化を客観的に把握するようなシステム構築やフィードバックに関する研究はほとんどされていない。そのため、本研究は留学直後に表出した影響を短期的影響、また帰国1年後の調査で表出した影響を長期的影響とし、都内私立大学のセメスター留学に参加した学生9名を対象に留学による影響を個人別態度構造分析により要素の抽出と学びの構造を把握することを試みた。延べ36回にわたる縦断的調査により、クラスターの内容による纏まりを1. 「認知・知識面」、2. 「精神面」、3. 「語学面 (英語)」、4. 「行動面」の4つに分類した。分析の結果、留学による短期的影響では文化に対する「認知・知識面」に関するものと「行動面」が大半を占めた。長期的影響では「行動面」が最多を占め、「語学面」が消滅するなど、興味深い結果となった。本研究は海外留学に参加した学生個人の視点から留学による影響を調査したものであり、既存の研究には無いミクロな視点からアプローチした研究成果である。

キーワード：個人別態度構造分析 (PAC 分析)、海外留学における学び、留学の短期的影響、留学の長期的影響、留学の教育的価値

### 1. 本研究の背景と目的

日本の企業はグローバル人材を求め、経済同好会 (2014) 『企業の採用と教育に関するアンケート調査結果』によると、直近1年間の新卒者採用において、海外留学経験を有している日本人より日本で学んだ外国人を採用した企業が多いことが明らかになった。特に外国人の留学生と新卒者を採用した企業は顕著な伸びを見せ、前回2012年の調査と比較し、外国人留学生 (日本の大学・大学院を卒業・修了した外国人新卒者) は45.7% から52.3% に増え、外国人新卒者 (外国の大学・大学院を卒業・修了した外国人新卒者) は17.7% から29.5% に大幅に増加した。

では同様に、外国の大学・大学院を卒業・修了した日本人新卒者 (調査では日本人留学生としている) も伸びているかと思いきや、日本人留学生 (外国の大学・大学院を卒業・修了した日本人新卒者) を採用した企業はほぼ横ばい (33.6% → 33.0%) で、企業のグローバル化の担い手として一役買っているのは主に外国人留学生や外国人新卒者ということがいえる。このように企業側は採用する際に日本人学生の“留学経験”をそれほど特別なモノとしてとらえておらず、また日本人学生は留学経験を積むということに対してさほど魅力を感じていない可能性を指摘できる。またそれを裏付けるかのように日本からの海外の高等教育機関への留学者数は減っており、

経済協力開発機構（OECD）、ユネスコ統計局などの資料をもとに文部科学省がまとめたデータによると、日本から海外の高等教育機関への留学者数は2004年の82,945人をピークとして、2016年度の留学者数は55,969人になるなど（文部科学省, 2018）、全体的には年々減少傾向<sup>1</sup>であり、日本人学生の「内向き志向」が指摘されている（日本経済新聞: 2011）。フルブライトジャパン（日米教育委員会）事務局長のデビッド・サターホワイト氏は米国留学が減った理由として「少子化による学生数の減少」や「外国人教授や英語授業などの国内の大学の国際化」、「就職活動が前倒しになり留学すると不利になる」、「今の日本社会には留学を後押しする風潮がない」等、興味深い14の理由を挙げており、同様に日本人の海外に対する興味も以前とは比べ物にならないほど低下していると報告している（日本経済新聞: 2011）。また産業能率大学（2015）が2015年に新入社員（18歳～26歳）を対象に行ったグローバル意識調査によると「海外で働きたいとは思わない」とする回答が63.7%に達し、2001年からの調査以来最も高い数値となったと報告している。これらデータが示すように、学生を取り囲む社会情勢、経済状況、風潮など複合的な影響が絡み合い、それらは日本人学生の海外への意識や留学へのモチベーションを下げる要因となっていると指摘する声ある。

先述した懸念は聞かれるものの、留学に対する教育的評価の高さは多くの調査からも明らかになっており、例えば留学から帰国した学生を対象にした直近の大規模調査では平成29年度文部科学省委託事業として学校法人河合塾（2018）の海外留学の効果を検証した『日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究』がある。これは約7万人の学生データを使用したもので、それによると「留学に対する学生の評価は全体として極めて高いが、事前研修・オリエンテーション・インターンシップ等の機会が整備されている場合ほど評価が高く（中略）、能力の学びの観点からは留学期間にかかわらず、留学の効果は認められる」（学校法人河合塾, 2018）との結論を出している。このように留学に行った学生の留学に対する評価はどの調査においても極めて高い。

このような質問紙による調査も充実しているが文献調査を進めてみると、留学前後の学習者自身の変化や成長に着目した研究、学習者個人に対する留学

の長期的影響に関する調査、及び学習者自身がその変化を客観的に把握するようなシステム構築やフィードバックに関する研究はほとんど存在しないということが分かった。そのため、本研究は留学の短期的・長期的影響に関する質的調査の一端として、都内私立大学（1校）のセメスター留学（語学研修）に参加した学生9名を対象に個人別態度構造分析により要素の抽出と学びの構造を把握することを試みた。本研究は留学直後に実施した調査結果を「短期的影響」とし、また帰国後1年経過してから実施した調査結果を「長期的影響」とし、学習者の視点から留学による影響を縦断的に調査した報告であり、留学の教育的価値を検証する新たな試みの第一歩である。私個人の研究では研究機関の実施する大規模質問紙調査には到底太刀打ちできないが、本研究は質問紙調査では測りきれないミクロの部分に焦点を当て、違った側面から留学の効果を検証することでオリジナリティがあり、また研究の価値を生み出していく所存である。

本研究はJSPS科研費JP17K03017を受けたものであり、この内容はその一端を担うものである。また一連の研究プロセスにおいて倫理的配慮の点でも十分に留意し、調査協力者に対し、調査目的、データの利用方法等、倫理的配慮に関する口頭説明、及び文面での説明を行い、承諾書を提出してもらった。

## 2. 本研究の手法

本研究の分析手法として「個人別態度構造分析」（以下PAC分析）を使用する。これは内藤（1993, 2002）によって開発された方法で、PAC分析は質問紙調査のように平均値を求める性質の手法ではなく、自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、研究者による総合的解釈を通じて個人別に態度やイメージ構造を分析する方法であり、再現性・信頼性が高いといわれ“量的・質的の両方を兼ねた研究手法”として、PAC分析を使用した研究やその有効性に言及する論文（新館・松崎, 2011; 濱川, 2009; 八若, 2007; 佐々木, 2012）も多く存在している。ここで質問紙調査の欠点を述べたい。質問紙調査は質問紙自体が調査者のフレームを基に作成され、その個々の項目に関する回答者個人の解釈が均一でないことや、謙

遜の度合いのような日本人らしさが色濃く回答に反映されてしまう点、マークシートの項目以外の回答を全て排除するという点、また回答は調査者の解釈によって研究が進められる点等が挙げられる。一方、PAC分析を使用した今回の分析は被験者個人の深層部から出てくるワード（項目）によってその後すべての分析が進み、質問紙では表面化しにくい部分や被験者が意識していない部分にも理解が及ぶメリットがあり、量的調査の利点は認識しつつも、本研究は調査者主体の分析方法でなく、被験者を主体に分析を進める手法であることを明記したい。なお、PAC分析の詳細な手順は前田（2017）に記載しており、本論文ではスペースの関係上割愛する。

### 3. データと分析概要

次に9名の被験者の属性と留学直後に実施したPAC分析結果（短期的影響）、および帰国から1年後の調査結果（長期的影響）を示す。各被験者のデンドログラムは本来、文末の図1のように出力され、各項目同士の繋がりがより鮮明ではあるが、本論文ではより見やすいという視点から各被験者における短期的影響と長期的影響を別途表を作成し、表1から表18にまとめた。各表の左側の数字は想起項目順位を示し、続いて想起項目名、重要度順位、各項目の持つ意味+ - 0（プラス、マイナス、どちらでもない）、クラスター名（CL）を記載した。また帰国1年後の調査では自己肯定感と留学満足度に関する質問もしており、自己肯定感は留学前と比較して自分に対する肯定感を5段階評価で質問し（3は変化なし、5は自己肯定感が最大）、また留学に対する満足度も5段階で質問した（3を起点として、5は留学に対する満足度が最大という意味である）。なお、被験者は全員2年次に留学しており、帰国から1年後の調査では3年次となったことを追記しておく。

#### 3-1. 学生Aの個人属性と概略

学生Aの個人属性は次の通りである。①性別：女、②学年：大学2年生、③留学先：アイルランド

学生Aの留学直後の短期的影響は表1にまとめた。学生Aは自由連想で8項目を挙げ、海外留学の学びで一番重要な項目は「人の優しさ」と回答した。このデンドログラムは大きく4つのクラスターに分けられ、クラスター1が「食文化の違い」で単

独項目となっており、クラスター2が「日本の方が接客が丁寧」、[時間にルーズ]で、クラスター3が「日本に興味を持っている人が多い」、[人の優しさ]、クラスター4が「外国人に対する反応」、[積極的]、[自分の意見をはっきり言う人が多い]である。次にクラスター分析されたデンドログラムに対し、学生A自身の解釈により各クラスターを命名してもらった。結果、クラスター1は〈CL1：食文化の違い〉、クラスター2は〈CL2：仕事に対する意識の違い〉、クラスター3は〈CL3：基本的に人間は優しい〉、クラスター4は〈CL4：積極性〉としてまとめることができるという。

4か月間のセメスター留学を経て、帰国から1年後の調査は表2にまとめた。留学の長期的影響として10項目、4クラスター（CL1：警戒心が強くなった、CL2：間違った他人の行動に意見が言えるようになった、CL3：興味関心がよりグローバルになった、CL4：積極的・社交的になった）が表出した。自分に対する肯定感は最大の5であり、留学に対する満足度も5であった。

表1 学生Aのデンドログラム（短期的影響）

想起項目	クラスター
5. 食文化の違い (8)+	CL1：食文化の違い
4. 日本の方が接客が丁寧 (3)-	CL2：仕事に対する意識の違い
2. 時間にルーズ (2)-	
3. 日本に興味を持っている人が多い (5)+	CL3：基本的に人間は優しい
1. 人の優しさ (1)+	
8. 外国人に対する反応 (7)0	CL4：積極性
7. 積極的 (6)+	
6. 自分の意見をはっきり言う人が多い (4)+	

留学先：アイルランド

表2 学生Aのデンドログラム（長期的影響）

想起項目	クラスター
9. 警戒心が強くなった (6)0	CL1：警戒心が強くなった
4. 日本は接客が丁寧 (8)+	CL2：間違った他人の行動に意見が言えるようになった
2. 時間に対する概念が違う (10)+	
5. 異文化への関心が深まった (2)+	CL3：興味関心がよりグローバルになった（学びへの影響）
8. 外国を身近に感じるようになった (5)+	
7. 日本のことをもっと勉強したくなった (3)+	
1. いろいろな国の食事がある (9)+	
6. 自分の意見が言えるようになった (1)+	CL4：積極的・社交的になった（性格への影響）
10. フレンドリーになった (7)+	
3. 外国人に対しての接し方が変わった (4)+	

自己肯定感5、留学満足度5

3-2. 学生Bの個人属性と概略

学生Bの個人属性は次の通りである。①性別:男、②留学先:アメリカ、③短期的影響:6項目&3クラスター(表3)、④長期的影響:6項目&3クラスター(表4)、⑤自己肯定感5、⑥留学満足度5

学生B以降はスペースの関係上、説明は表のみにとどめる。

表3 学生Bのデンドログラム(短期的影響)

想起項目	クラスター
5.行動力(5)+	CL1:外面的な成長(行動力)
4.自信(6)+	CL2:内面的な成長(行動⇔自信)
6.グローバルな視野(4)+	CL3:日本人としての自覚と異文化で生きていく力
3.日本人としての意識と自覚(3)0	
2.国境を越えた友人(2)+	
1.語学力(1)+	

留学先:アメリカ

表4 学生Bのデンドログラム(長期的影響)

想起項目	クラスター
5.自信(2)+	CL1:自分はあるという強い自信(性格への影響)
4.国を超えても似ている部分と違う部分(5)0	CL2:文化に対する認識への影響(文化理解)
2.語学力(3)+	CL3:国際人としての意識
1.国際的思考(4)+	
6.行動力(1)+	
3.日本人としての意識・自覚(6)+	

自己肯定感5、留学満足度5

3-3. 学生Cの個人属性と概略

①女、②留学先:オーストラリア、③短期的影響:10項目&4クラスター(表5)、④長期的影響:7項目&2クラスター(表6)、⑤自己肯定感5、⑥留学満足度5

表5 学生Cのデンドログラム(短期的影響)

想起項目	クラスター
10.水は大切(9)0	CL1:水に対する意識の違い(異文化理解)
9.スラング(10)+	
6.責任感(2)+	CL2:積極的になった
2.行動力(1)+	
1.積極性(3)+	
7.文化・習慣(5)-	CL3:日本の素晴らしさに対する気づき(自文化理解)
8.大きい声で話す(6)+	CL4:コミュニケーション能力の向上
5.発音(8)+	
4.友達(7)+	
3.コミュニケーション(4)+	

留学先:オーストラリア

表6 学生Cのデンドログラム(長期的影響)

想起項目	クラスター
6.文化の違い(4)0	CL1:文化理解への影響
3.発音(7)+	CL2:生き方や他者との関わり方が積極的になった
7.違う国の友達(6)+	
5.自信をもって話すこと(5)+	
1.リスニング力(2)+	
4.行動力(3)+	
2.積極的な姿勢(1)+	

自己肯定感5、留学満足度5

3-4. 学生Dの個人属性と概略

①女、②留学先:オーストラリア、③短期的影響:6項目&2クラスター(表7)、④長期的影響:6項目&3クラスター(表8)、⑤自己肯定感4、⑥留学満足度5

表7 学生Dのデンドログラム(短期的影響)

想起項目	クラスター
5.自分の意見に対する考え方(4)+	CL1:人に伝える力・自己主張
4.コミュニケーション能力やプレゼン能力(3)+	
1.英会話の上達(1)+	
3.他国の文化や考え方の違い(5)+	CL2:異文化と自文化に対する気づき
6.他国の友人ができた(6)+	
2.友人関係の輪の広がり(2)+	

留学先:オーストラリア

表8 学生Dのデンドログラム(長期的影響)

想起項目	クラスター
6.日本の良さ(6)+	CL1:愛国心への影響
5.チャレンジ精神(5)+	CL2:生きていく力への影響(対自分)
3.タフな心(4)+	
1.英会話能力(1)+	CL3:コミュニケーション能力への影響(対他人)
4.広い交友関係(3)+	
2.コミュニケーション能力(2)+	

自己肯定感4、留学満足度5

3-5. 学生Eの個人属性と概略

①男、②留学先:オーストラリア、③短期的影響:5項目&2クラスター(表9)、④長期的影響:5項目&2クラスター(表10)、⑤自己肯定感4、⑥留学満足度5

表9 学生Eのデンドログラム(短期的影響)

想起項目	クラスター
5. 予習復習の大切さ (3)+	CL1: 英語の勉強に対する姿勢
4. 中国人が優しい (5)+	CL2: 異文化理解・国際感覚
2. 国民性 (2)+	
3. 積極性 (4)+	
1. 文化の違い (1)0	

留学先: オーストラリア

表10 学生Eのデンドログラム(長期的影響)

想起項目	クラスター
5. 言いたいことを言う力 (3)+	CL1: 積極的・社会的になった(性格への影響)
4. 社交性 (2)+	
1. 英語力 (1)+	
3. 環境の変化に対応する力 (4)+	CL2: 環境適応力への影響
2. 異文化に対する理解力 (5)+	

自己肯定感4、留学満足度5

### 3-6. 学生Fの個人属性と概略

①女、②留学先: アイルランド、③短期的影響: 8項目 & 2クラスター(表11)、④長期的影響: 12項目 & 3クラスター(表12)、⑤自己肯定感4、⑥留学満足度5

表11 学生Fのデンドログラム(短期的影響)

想起項目	クラスター
8. 好奇心 (7)0	CL1: 生きていく原動力(好奇心)
5. やる気 (2)+	CL2: 海外で生きていく力
3. 自信 (4)0	
6. 外国のマナーや礼儀 (1)+	
4. 知識 (5)0	
1. 友達が増えた (8)+	
7. コミュニケーション能力 (3)+	
2. 英会話力	

留学先: アイルランド

表12 学生Fのデンドログラム(長期的影響)

想起項目	クラスター
9. 予測する力 (3)+	CL1: 自立心(自助力への影響)
12. お金 (4)-	CL2: お金に対する価値観への影響(日本の良さ)
5. 日本が恵まれていること (8)+	CL3: 積極的・社会的になった(性格への影響)
2. 海外へ都子tに対し積極的になった (12)+	
6. 自分がまだ知らない物事に対する探究心 (5)+	
4. 幅広い友人 (1)+	
11. 人と話すことへの積極性 (6)+	
3. 積極的に取り組み事の重要性 (2)+	
8. 行動力 (7)+	
7. 英語の日常会話力 (9)+	
10. 英語のリスニング力 (10)+	
1. 外国の方と話すことに抵抗がなくなった (11)+	

自己肯定感4、留学満足度5

### 3-7. 学生Gの個人属性と概略

①男、②留学先: カナダ、③短期的影響: 5項目 & 3クラスター(表13)、④長期的影響: 4項目 & 2クラスター(表14)、⑤自己肯定感4、⑥留学満足度5

表13 学生Gのデンドログラム(短期的影響)

想起項目	クラスター
5. 日本の治安の良さ (5)+	CL1: 日本に対する気づき
4. 英語 (4)+	CL2: 英語に関する学び
2. カナダ人と日本人の違い (3)+	CL3: 異文化に対する気づき
3. 習慣 (2)+	
1. 文化の違い (1)+	

留学先: カナダ

表14 学生Gのデンドログラム(長期的影響)

想起項目	クラスター
3. 時間の大切さ (4)+	CL1: 知識・経験の貯蔵
1. 日本とカナダの文化の違い (1)+	CL2: 他人との関係を築く力の向上
4. 友達 (3)+	
2. 英語を使って話す楽しさ (2)+	

自己肯定感4、留学満足度5

### 3-8. 学生Hの個人属性と概略

①女、②留学先: オーストラリア、③短期的影響: 9項目 & 3クラスター(表15)、④長期的影響: 9項目 & 4クラスター(表16)、⑤自己肯定感5、⑥留学満足度5

表15 学生Hのデンドログラム(短期的影響)

想起項目	クラスター
3. 何事も自分から行動する (2)+	CL1: 積極性
8. どんなことでもチャレンジしてみる (5)+	
2. 積極性 (4)+	
9. 勉強に対する姿勢 (7)+	CL2: 学習態度
4. 分からないことがあれば何でもすぐに聞く (3)+	CL3: 異文化における人との関わり方
7. 貴重品等自分の物はしっかり自分で管理する (8)0	
6. 目が合ったら知らない人でも挨拶と笑顔 (9)0	
5. "NO"をちゃんと言う (6)+	
1. コミュニケーション方法の違い (1)0	

留学先: オーストラリア

表 16 学生Hのデンドログラム(長期的影響)

想起項目	クラスター
9. レディーファースト (9)+	CL1: 文化理解
7. 海外の人はフレンドリー (7)+	
8. さらに物事をポジティブに考えるようになった (8)+	CL2: 人生の満足感への影響
6. 郷に入っては郷に従え (5)+	CL3: 自立心(自助力への影響)
3. 自分の身は自分で守る (4)0	
5. アイコンタクトをしっかりとる (6)+	
4. 分からないことがあればすぐに聞く (3)+	CL4: 自信と積極性(性格への影響)
2. 授業に積極的 (2)+	
1. 自分の思ったことはちゃんと伝える (1)+	

自己肯定感5、留学満足度5

3-9. 学生Iの個人属性と概略

①男、②留学先:カナダ、③短期的影響:12項目&2クラスター(表17)、④長期的影響:11項目&2クラスター(表18)、⑤自己肯定感5、⑥留学満足度5

表 17 学生Iのデンドログラム(短期的影響)

想起項目	クラスター
9. 自立 (10)0	CL1: 日本との違い(異文化・自文化理解)
5. 食文化 (9)+	
1. 文化理解 (2)+	
12. 読解力 (7)+	CL2: 英語力の向上
6. 英語は難しい (12)-	
11. リスニング能力 (3)+	
2. 英語の発音 (5)+	
10. ニュアンス (8)+	
7. 文法が違って大丈夫 (6)0	
3. スラング (11)0	
8. 英会話 (4)+	
4. コミュニケーション能力 (1)+	

留学先:カナダ

表 18 学生Iのデンドログラム(長期的影響)

想起項目	クラスター
10. 文化(食・住) (3)+	CL1: 文化の違いに対する知識への影響
6. 海外での休日の過ごし方 (11)+	
5. 海外の食生活 (5)0	CL2: 積極的・行動的になった(性格への影響)
9. カナダの治安の悪さ (10)-	
2. スラング (9)0	
1. 英語の発音 (7)0	
4. 協力の大切さ (4)+	
3. 行動力 (6)+	
7. 外人とのコミュニケーション (1)+	
11. 差別 (8)-	
8. 礼儀 (2)0	

自己肯定感5、留学満足度5

4. 結果と考察

4-1. 留学の教育的効果への新たな視点

足立(2010)は海外留学における学部生の教育的価値を「学問・学術的学び」、「外国語運用能力の獲得」、「異文化適応能力の獲得」、「人間的成長」と4つのカテゴリでまとめており、前田(2017)も自身の研究で何度か足立(2010)を援用してきたが、本研究の中で留学した側から見ると足立(2010)の示すカテゴリは全て「人間的成長」の中に含まれ、各項目が独立した並列カテゴリとして扱えないのではないかという疑問が生まれた。本研究による延べ36回にわたる調査の結果、クラスターの内容による纏まりは1.「認知・知識面(文化的気づきと知識の深化、異文化・自文化理解)」、2.「精神面」、3.「語学面(英語)」、4.「行動面」の4つの分類により表すことができた。これにより留学は学習者の「人間的成長」に影響を及ぼし、その人間的成長の中にカテゴリとして分けるならば、「行動面」、「認知面」、「精神面」、「語学面」の4つの側面において影響を与えるのではないかという点をあげたい。

次にそれぞれのクラスターの性質を基に分類した。留学直後の調査(短期的影響)では25クラスター表出し、そのうち「認知・知識面」に関するものは10クラスター、「精神面」は1クラスター、「語学面」は3クラスター、そして「行動面」は11クラスターが分類された(図2)。

短期的影響(留学直後)25クラスター

<p><b>認知・知識面(文化的気づきと知識の深化、異文化自文化理解) 10</b></p> <p>〈食文化の違い〉</p> <p>〈日本に対する気づき〉</p> <p>〈仕事に対する意識の違い〉</p> <p>〈異文化に対する気づき〉</p> <p>〈日本との違い(異文化・自文化理解)〉</p> <p>〈水に対する意識の違い(異文化理解)〉</p> <p>〈異文化と自文化に対する気づき〉</p> <p>〈日本の素晴らしさに対する気づき(自文化理解)〉</p> <p>〈異文化理解・国際感覚〉</p> <p>〈基本的に人間は優しい〉</p>	<p><b>語学面(英語力) 3</b></p> <p>〈英語の勉強に対する姿勢〉</p> <p>〈英語に関する学び〉</p> <p>〈英語力の向上〉</p>
<p><b>精神面 1</b></p> <p>〈日本人としての自覚と異文化で生きていく力〉</p>	<p><b>行動面 11</b></p> <p>〈学習態度〉〈積極的になった〉</p> <p>〈生きていく原動力(好奇心)〉</p> <p>〈外面的な成長(行動力)〉〈積極性〉</p> <p>〈人に伝える力・自己主張〉〈積極性〉</p> <p>〈内面的な成長(行動⇄自信)〉</p> <p>〈コミュニケーション能力の向上〉</p> <p>〈異文化における人との関わり方〉</p> <p>〈海外で生きていく力(行動力)〉</p>

図2 短期的影響(留学直後)

また帰国して1年後に実施した調査(長期的影響)では25クラスター表出し、そのうち「認知・知識面」に関するものは7クラスター、「精神面」は3クラスター、「語学面」は0クラスター、そして「行動面」

は15クラスターが分類された(図3)。

長期的影響(帰国1年後)25クラスター

認知・知識面(文化的気づきと知識の深化、異文化自文化理解) 7 〈文化理解への影響〉 〈知識・経験の貯蔵〉 〈文化に対する認識への影響(文化理解)〉 〈文化理解〉 〈お金に対する価値観への影響(日本の良さ)〉 〈興味関心がよりグローバルになった〉 〈文化の違いに対する知識への影響〉	行動面 15 〈積極的・行動的になった(性格への影響)〉 〈自分ではできると強い自信(性格への影響)〉 〈積極的・社会的になった(性格への影響)〉 〈コミュニケーション能力への影響(対他人)〉 〈生きていく力への影響(対自分)〉 〈積極的・社会的になった(性格への影響)〉 〈他人との関係を築く力の向上〉 〈積極的・社会的になった(性格への影響)〉 〈自立心(自助力への影響)〉 〈環境適応力への影響〉 〈自信と積極性(性格への影響)〉 〈自立心(自助力への影響)〉 〈間違った他人の行動に意見が言えるようになった〉 〈生き方や他者との関わり方が積極的になった〉 〈警戒心が強くなった(自己防衛力への影響)〉
精神面 3 〈愛国心への影響〉 〈国際人としての意識〉 〈人生の満足感への影響(感謝の気持ち)〉	
語学面(英語力) 0	

図3 長期的影響(帰国後1年)

それにより留学による短期的影響では「行動面」と文化に対する「認知・知識面」に関するものが多くを占めたが、長期的影響では「行動面」が最多を占め、「語学面」が消滅したのは興味深い結果となった(表19)。

表19 短期的影響と長期的影響比較

	短期的影響	長期的影響	増減
	25クラスター	25クラスター	
1. 認知・知識面	10	7	30%減
2. 精神面	1	3	200%増
3. 語学面	3	0	消滅
4. 行動面	11	15	36%増

本調査はまだ継続段階ではあるが留学の影響は短期的に見ると主に“異文化に触れることにより個人の文化的気づきと知識の深化、異文化理解に関する認知・知識面”に多くの影響を及ぼしたことが見える(例:食文化、日本、仕事に対する意識の違い、日本の素晴らしさに対する気づき等)。長期的影響としては留学直後の海外に関する知識や経験に関する「認知・知識面」が個人の中で知識として留まることのみならず、“思考から個人の行動パターンへと幅広く影響を与える可能性”が表出し、「積極的になった」、「自信がついた」、「コミュニケーション能力の向上」等、具体的な事例とともに個人の「行動面」が変化した様子が浮き彫りとなった。

そのことから留学は、まず個人における知識や認知面、意識や価値観に影響を及ぼし、それら思考に与える影響により、ある程度の期間を経て(本調査

では1年)、個人の行動の変化を徐々に引き起こしているといえ、本研究において使用した個人別態度構造分析は、個人の経験の中で得た異文化の知識や経験が月日を重ねて長期的に被験者にどの側面で影響を与えたのかという様子が可視化される役割を担ったといえる。

#### 4-2. 留学が与える長期的影響の構成要素

次に本研究で表出したクラスターを分類し、表19をもとに留学が与える長期的影響の構成要素を影響力の大から小として作成した(表20)。留学が最も影響を与えるものが1.「行動面」であり、内容は積極性、自信、適応力、コミュニケーション能力の向上等が挙げられる。そして次に2.「認知・知識面」は気づきから文化理解への発展であるといえ(気づき→文化的理解への発展)、これには異文化や自文化を理解する力、日本や日本人の良さへの気づき、文化の違いを認識し認めることができる等が含ま

表20 本研究から抽出されたクラスターによる留学の長期的影響

人間の成長	大	① 行動面	<ul style="list-style-type: none"> <li>コミュニケーション能力(自分の意見を言語化して伝えること、フレンドリーさ)</li> <li>積極性・行動力(自ら考え行動に移す力、探求心、好奇心)</li> <li>他者との関係を築く力(他者との違いを受け入れる寛容さ、壁を取り除く努力)</li> <li>自信(異文化で培った経験が強い自信になり、積極的・行動的になる)</li> <li>自立(問題解決能力、自己防衛力、責任感、精神的な自立が行動面に現れる)</li> <li>環境適応力(異なる環境を理解し、適応できるようになる)</li> </ul>
	↑	② 知識・認知面	<ul style="list-style-type: none"> <li>新たな価値観・常識・国を超えて似ている部分や違う部分を発見</li> <li>自文化・異文化理解(自国の文化・価値観・常識・習慣などを留学先国のそれと比較する事で自文化を再発見し、自文化と異文化を理解する)</li> <li>留学先の国の文化や歴史、暮らしなどに関する様々な知識</li> <li>ものごとを複眼的に捉える(違う視点に立って物事を考えられる)</li> </ul>
	↓	③ 精神面	<ul style="list-style-type: none"> <li>アイデンティティの確立(自己の文化・愛国心・日本人としての意識と民族的アイデンティティの確立)</li> <li>感謝の気持ち(環境や周囲への感謝の気持ち、人生の満足感)</li> </ul>
	小	④ 語学面	<ul style="list-style-type: none"> <li>語学(英語)の総合的向上(発音、読解力、文法、言い回し、リスニング・ニュアンス)</li> <li>英語の楽しさ</li> </ul>

まれる。そして3.「精神面」はその文化的理解から精神性に発展であるといえ（文化的理解→精神性に発展）、これには愛国心や日本人であるというアイデンティティの強化が含まれる。そして影響力の最も小さかったものは4.「語学面」であるといえ、英語力単体は学習者が感じる留学の効果としては消滅したことからも、留学で得たものとして、もはや英語を思い浮かべる学習者は少なく、英語は単なるコミュニケーションツールとしての認識に留まった可能性が高い。それよりも留学による長期的影響は、英語によるコミュニケーションから生み出された自信や積極性、行動力へと繋がっていったとみるのが自然であろう。

#### 4-3. “学びの意識化フレームワーク” 構築へ

先述したように留学の効果に関する研究は多いが、学習者自身がその変化を客観的に把握するようなシステム構築やフィードバックに関する研究はほとんどない。そのため本研究では“学びの意識化フレームワーク”構築への糸口として、本実験の最後に学習者から得たデータ全てをまとめ、資料として学習者に提示し、各自、振り返りの材料としてもらい文章を提出してもらった。

例えば、学生Aは次のように振り返りをした。「今回まとめたものを見た時、性格や日常生活などブロックごとに分かれたけれどよく見てみるとそれぞれが影響し合って1つに繋がっているのを見てしっかり自分が変わったのだと思いました。（中略）」と語り、学生Bは「自己分析をして、何を経験したのか言いたいことがまとまり、また日本人の良さを再確認した」ことが国際人としての意識へと繋がったと語った。学生Cは、「(留学直後の)1つ1つの結びつきが応用的になり、学習部分でも自分自身成長し、身につき、私の日常や人格に影響を与え（中略）、私の身の回りの人脈や生き方が変化し視野が広がった。留学を経て異文化理解を学ぶことで、今まで思っていた自分の固定概念を壊すような考えを持ち価値観が変わった。」と記述し、学生Dは「1年前と現在の調査結果を見比べると根本的な得られたものは変わらず、この1年間留学で得た上での生活を通してもっと日常的に使える“得られたこと”に応用されたように感じました。」と振り返った。また学生Eは「私の中での留学の目標は、

英語の能力の向上（主にスピーキング）と異文化交流だったので、留学直後の紙にはそう言ったことが書かれていました。しかし留学から1年後の紙を見てみると、内面的なところ（社交性など）が出てきていることから、1年たって内面的な影響を感じる場面が多かったからかと思います。」と語り、学生Fは「留学による自身への影響がより詳細にわかった。好奇心であったり、友達、英会話力については変わらず意見に出てきたが、留学後あらためて長く日本で過ごし、旅行等に行ったことによって、予測する力であったり、積極性、英語を話すことへの抵抗のなさなどの長期的な影響、気づきが増えたのだと感じた。」と語った。

学生Gは「日本の治安の良さはカナダにいる時にとても感じたが、1年も経つと日本の治安の良さが当たり前と思うようになり、その発想が無くなっていた。今回“友達”というワードが出たのは当時カナダにいた時は友達に対し何も思わなかったし帰国直後も何も心境に変化はなかったが、年が経つに連れて“海外でできた友達”という価値が自分の中にでき、大切にしようという心変わりによってこのワードがでたのではないかと思った。（中略）最後にこのやり取りを通して時間が経つにつれて忘れてしまっていた当たり前の事や学んだこと、異文化の良いところなどをもう一度思い出し、吸収する良い機会だったと感じた。」学生Hは「留学直後と一年経ってからの影響の2つを見比べた時に一年経ってこんなにも差があり、変化していることに驚きました。直後は割と自分中心のことであったり、積極性や授業態度、異文化における人との関わり方と、目先のことのような学びでしたが、一年経ち、人生への満足感や感謝の気持ちであったり、生活全般の自助力と広い視野での影響があると実感しました。英語を学びに行った留学ですが、それ以外に普段の自分への影響がこんなにもあるということを知り、良かったです。日本に帰ってきてから一年、日本の暮らしやすさや母国の安心感が強くなり（中略）、今回自分への影響を知り、改めてもっと感受性豊かになって他文化を経験したいという気持ちも強くなりました。」と振り返った。

これらは被験者から得られたコメントの一部抜粋ではあるが、このように特に新鮮だったり、印象深かったものが帰国直後は表出している1年経つと

項目そのものが消滅してしまったり、逆に新たに表出したり、また1年経つと逆に「価値」が出てくる項目もあつたりと被験者9名は1年後に振り返り作業をすることにより再度自分の留学経験を見つめし、自身が受けた影響や価値を新たに見出した様子がうかがえた。本件に関しては、先述した学校法人河合塾（2018）の調査結果にあつたように、留学に対する学生の評価は留学前後の支援によってより高くなることから学生を留学に送り出すだけでなく、留学後のサポートをもより充実させることにより留学の学びを最大限に生かすことになると結論付けられており、この視点においても本研究で得た知見は役に立つと考えている。

## 5. さいごに

本研究は留学の短期的・長期的影響に関する質的調査の一端として、都内私立大学の Semester 留学に参加した学生9名を対象に留学による「短期的影響」と「長期的影響」を個人別態度構造分析により要素の抽出と学びの構造を把握することを試みた。本分析は学習者本人を主軸とした研究で、留学直後に出現した影響を「短期的影響」とし、また留学から1年後の分析結果を「長期的影響」とし、延べ36回にわたる調査の結果、クラスターの内容による纏まりを1.「認知・知識面（文化的気づきと知識の深化、異文化自文化理解）」、2.「精神面」、3.「語学面（英語）」、4.「行動面」の4つに分類した。分析の結果、留学による短期的影響では文化に対する「認知・知識面」に関するものと「行動面」が大半を占め、帰国して1年後に実施した調査（長期的影響）では「行動面」が最多を占め、「語学面」が消滅し、興味深い結果となった。このことから留学は、まず個人における知識や認知面、意識や価値観に影響を及ぼし、個人の経験の中で得た異文化の知識や経験が1年をかけて長期的に被験者の行動面に影響を与えた可能性を指摘した。また表19の「短期的影響と長期的影響比較」と表20の「本研究から抽出されたクラスターによる留学の長期的影響」は留学の効果に関する多くの調査にあらたな視点を加えたと考えている。また調査終了後に学習者自身の変化が客観的に把握できるように全てのデンドログラムを学習者に資料として提示し、今後のシステム構築に繋がる糸口とした。

さいごに、留学の教育的効果は多くの文献や研究、大規模調査で明らかにされており、また留学幹旋業者のホームページなどにもその教育的効果、留学によって得られるものに関する情報は溢れており、留学の教育的効果に対する疑念は少ない。しかし長期的にみて留学が学習者に対しどのような効果をもたらしているのかという留学直後からの追跡調査は殆どなく、この分野のデータも乏しいといえる。本研究では学習者の視点から留学の短期的影響と長期的影響を分析し、その結果を学習者に提示することにより学習者個人が留学で学んだことが可視化され、帰国1年後に再度分析することで自分の変化や学んだこと、また1年経っても色あせない要素が確認でき、留学が自分の成長のどの部分に影響を与え変化をもたらしたのか見比べ確認でき、留学の学びを最大化する一つの方法を提示した。

本研究は英語圏での4か月間の語学留学に参加した学生を対象としており、基本的には留学に積極的に参加した背景を持つことから留学中の行動や態度に影響をした可能性もあり、また学部留学でないことから学術的な学びというよりは異文化への関心が強かったという点もあることを付け足しておく。しかし同時に語学研修が主目的にもかかわらず、留学直後には語学のクラスターがほとんど出現せず、さらに1年後には語学のクラスターが消滅するのは興味深い現象であり、留学の短期的影響・長期的影響として今後の研究へと繋げたい。また、学習者の視点としては振り返る作業も多くの気づきを与えたことから学びの意識化フレームワークとして、今後は留学の短期的影響や長期的影響が学習者個人に提示でき、学習者の学びをさらに手助けできるようなフレームワークを完成させていく所存である。

## 謝 辞

本研究は JSPS 科研費 JP17K03017 の助成を受けたものであり、本論文はその研究の一端を担うものである。

## 注

- 1) 日本学生支援機構のデータによると大学協定などに基づく日本人留学生数は2009年以降増加傾向であるとしているが、その内訳は2017年度総留学生数105,303人中、1か月未満の短期留学が

7割近くを占めており(文部科学省, 2018)、日本からの海外留学者数の統一的な定義はなく日本政府としては正確な海外留学者数は把握できていないといえる。本論文では最も一般的に使用される文部科学省のデータを使用している。

参考文献

足立恭則(2010) 大学学部課程における海外留学の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ『東京英和女学院大学人文・社会科学論集』第28号, pp.77-91.

学校法人河合塾(2018)「『日本人の海外留学効果測定に関する調査研究』成果報告書」平成29年度文部科学省委託事業 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/\\_icsFiles/afeldfile/2018/11/22/1411310\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afeldfile/2018/11/22/1411310_1.pdf) (2019/6/6)

経済同好会(2014)『企業の採用と教育に関するアンケート調査結果』 <https://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2014/pdf/141222a.pdf> (2019/5/9)

佐々木良造(2012)「PAC分析を用いた日本語ボランティアの態度と態度の変化に関する研究」第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム要旨.

産業能率大学(2015)『第6回新入社員のグローバル意識調査』 <http://www.sanno.ac.jp/research/vbnear0000000q91-att/global2015.pdf> (2017/5/18)

新館啓一・松崎学(2011)「教師の自己分析へのPAC分析の適用可能性に関する研究-筆者自身の

新任期の自己成長を振り返ることを通して」、『山形大学 教職・教育実践研究』, 6, pp.27-37.

八若壽美子(2007)「学部・大学院留学生の日本語学習における自己評価の変容-PAC分析による事例的研究」、『言語文化と日本語教育』, 33号, pp.117-120.

濱川祐紀代(2009)「大学院留学生の漢字学習に関する意識調査-PAC分析による事例研究」JSL 漢字学習研究会誌1号, 国際交流基金日本語国際センター.

前田ひとみ(2017)「個人別態度構造分析による日本人学生の海外留学における学び」、『目白大学高等教育研究』, 第23号, pp.1-10.

文部科学省(2018)「『外国人留学生在籍状況調査』及び『日本人の海外留学者数』等について」平成31年1月18日 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/\\_icsFiles/afeldfile/2019/01/18/1412692\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afeldfile/2019/01/18/1412692_1.pdf) (2019/6/5)

内藤哲雄(1993)「個人別態度構造の分析について」『人文科学論集』, 27, pp.43-69.

内藤哲雄(2002)『PAC分析実施法入門「改訂版」: 個を科学する新技法への招待』, ナカニシヤ出版.

日本経済新聞(2011年12月14日)「日本の若者は本当に内向きなのか小倉和夫 x 鈴木謙介 x デビッド・サターホワイト」 <http://www.nikkei.com/article/DGXBZO37206690S1A211C100000/0/> (2019/9/26)

(受付日: 2019年10月31日、受理日2019年12月27日)

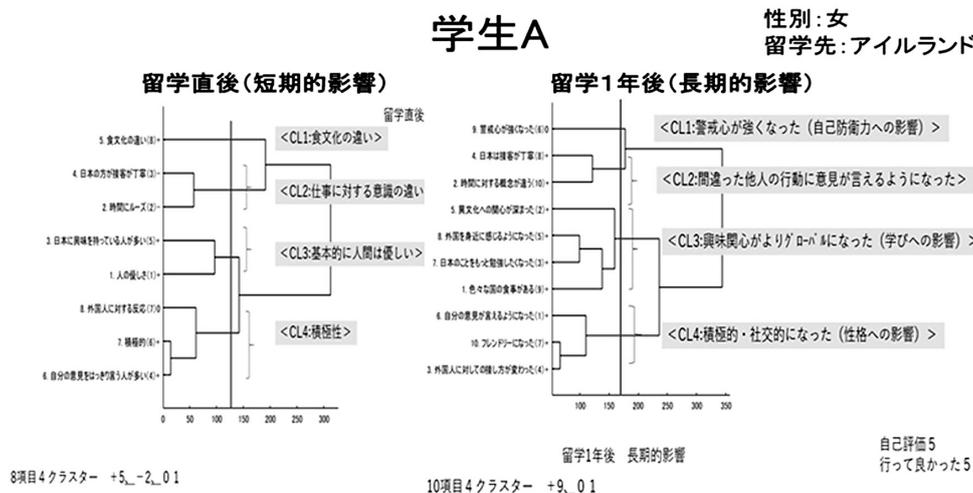


図1 例-学生Aのデンドログラム(短期的影響・長期的影響)